

西欧中世盛期の〈命名革命〉における名の変化と姓の出現

— イベリア半島の事例 —

Changes of Names and the Appearance of Surnames in the “Onomastic Revolution” of the High-Medieval Western Europe: a Case Study of the Iberian Peninsula

芝 紘 子
Hiroko SHIBA

キーワード：ストックの圧縮、名の集中、二要素命名システム、新しいキリスト教系名

Key words : condensation of stock, concentration of names,
two-element onomastic system, new Christian names

要約

西欧における中世盛期の「命名革命」は現代の姓名システムの源であるが、さまざまな事象が全面的に解明されているわけではない。そのひとつは、ストックの圧縮と集中の関係、およびこれら初期現象と大変革の真髄である二要素システム出現との関係である。これまでに相反する見解が示されているが、論拠が十分に示されているとはいいがたい。本稿は、イベリア半島北部西半分について利用可能な資料に量的・質的分析をあらためて施すことにより、これらの事象を再検証することを目的とする。判明したことは、10世紀の軽度の圧縮は伝統名の集中とかわったが、11、12世紀の極度の圧縮・集中に連動していたのは新たなキリスト教系名の採用と様々な系統の伝統名の大幅な用捨であったこと、二要素システムの伸張と確立は、第二・第三波の極度の圧縮および新キリスト教系数名の圧倒的優位と密接に関連していたことである。こうしたプロセスには当時社会が経験していた大変動がかかわっていたが、なかでも最大の要因はキリスト教の民衆への浸透であった。

Abstract

The modern nomenclature in Western Europe dates back to the “Onomastic Revolution” in the High Middle Ages. Various phenomena relating to this Revolution have not been fully elucidated. One point for investigation concerns the relationship between the condensation of stock and the concentration of names. Another point is how these two initial phenomena affected the appearance of surnames, which is the quintessence of the Revolution, and vice versa. Conflicting opinions have been presented,

but without a clear basis for the arguments.

This quantitative and qualitative analysis aims to re-examine these phenomena and their implications through exploring documents that are relevant to the western half of the northern Iberian Peninsula.

Findings include: the slight condensation in the tenth century correlated with early concentration of traditional names; the extreme condensation and concentration in the eleventh and twelfth century were associated with the use of new Christian names and the disuse of a great number of traditional names with various roots; and the expansion and consolidation of the two-element system were closely connected with the second and third extreme condensations, as well as the sheer dominance of several new Christian names.

These changes over the naming system were induced by monumental changes that this society was experiencing, with the most significant being the infiltration of Christianity.

はじめに

西ヨーロッパの今日ある姓名システムは、11～13世紀にかけての「命名革命」を経て形成された。先稿（2011）に記したように、姓名システムには豊かな歴史的情報が包摂されていると認識されるようになったのはわずかここ2、30年にすぎないが、近年はその研究が加速し、各地域についての成果があまた発表されている。均質で一定のまとまった数量の史料が期待しにくい時代であって、各研究が地域・時代にかんして断片的であることは否めないが、その情報量は膨大であり、複雑をきわめる。姓名システムを研究しようとする者は「マゾヒスト種族」に属すと自嘲まじりに評するのは、はやくも1980年後半に共通方法論での研究を提唱し、以来国際会議および共同研究を率いてきたモニカ・ブーラン博士その人である(Bourin, 2002)。「命名革命」の探究はいわば、時空間の三次元ジグソーパズルといえる。その研究にはマクロとミクロの分析がともに必須とされ、かつ両者の結びつきも考察しなければならない。それはまさしく、全体像を念頭におきながら個別のピースの文様・色彩・形状を吟味しつつ、像を構築していく作業である。さらには、ひと通り完成した「命名革命」像の、いまだ大雑把なピースの一つひとつにより細かな描写と豊かな色合いを施して、その鮮明度を高めていく努力がたえずもとめられている。

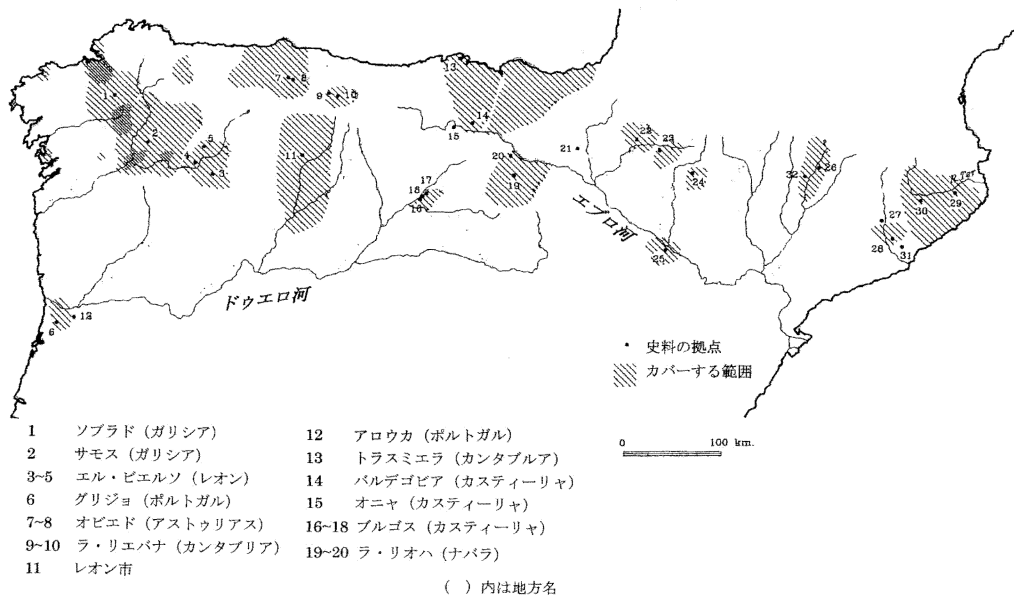
これまでイベリア半島北部域における「命名革命」を筆者なりにみてきた（1995, 2001, 2010）が、つぎつぎに提示される近年の研究成果をまえにして、さまざまな局面を再検討する必要性を感じてきた。そのひとつは、個人名のストックの圧縮（減少）と少数の名への集中という初期現象にかんしてである。この二つの現象はたがいに関連しあっているのか否か、また、それらは

「命名革命」の真髄である二要素命名システムの誕生の動因となったのか否かの問題である。現段階では、これらの点について研究者間の見解は分かれる。圧縮と集中にかんする史料分析が十分になされたとは言いがたく、またほとんどが個別の地域研究のため、一般化するには説得力に欠けるためであろう。小論においては、予断を廃して資料を比較分析することにより、イベリア半島北部西半分のレオン・カスティーリャ王国¹地域について、これら未決の事象をできるかぎりあきらかにし、全体的な動向の把握に努めたい。

I. 初期現象としてのストックの圧縮

中世前期、ゲルマン諸部族の支配下にあった西ヨーロッパにおいてはローマ貴族の個人名+氏族名+家名という命名法は消滅し去り、すべての個人は階層を問わず、ゲルマン式にひとつの名しか持たなかった。イベリア半島においても、10世紀末まではおおた単名（個人名のみ）の状態がつついた。そのため、名は豊富であり、ストック（100人あたりの名の数。名あたりの人数で示されることもある）は90前後のことが多かった。とりわけ古来さまざまな民族が往来した半島は、ほかの西欧諸地域にくらべて多様な系統の名が混在していた。ローマの版図に組み込まれる以前の土着系や出自不明のバスク系、ローマ属州時代のラテン系、西ゴート時代のゲルマン系、8世紀初頭のイスラーム侵攻以降のアラブ系などであり、地域によって使用系統に特色があった。命名法が変化しはじめた10、11世紀の時点では、半島の南4分の3がいまだイスラーム圏に属していたため、史料はほとんどがドゥエロ河とエプロ河以北の带状地帯に散在する、修道院や教会などに残された断片的な文書に限られ（図1参照）、しかも、「命名革命」の最終局面

図1：史料の拠点とカバーする範囲



と想定される13世紀の史料に欠ける。変化の開始前後から実質的なレコンキスタ（再征服）がはじまり、それに伴う大規模な再入植活動によって人的動性が極度に高まったため、社会全体がいわば沸騰状態に陥った。そうした社会の大変動が記述史料を残す作業自体を困難にし、また、たとえ作成されたにせよ、大混乱のなかで多くが逸失したのであろう。

中世前期までの豊富なストックは、中世盛期に激減していく。圧縮 condensation と表現される現象である。この指標は、名が無制限にあるわけではないので、サンプル数が多いほどストック値は下がる傾向にある（To Figueras, 1995）が、すくなくとも傾向は示してくれる。旧アストゥリアス王国の都オビエド、レオン王国の都レオン、サンティアゴ巡礼路の結節点ブルゴスの属域、エプロ河上流域のバルデゴビア、それにポルトガル域入植地アロウカ、これら5地域における俗人男子名のストック推移をみてみよう（表1）。資料間に多少の時代区分の不整合はあるが、比較を妨げるほどではない。まず、ポルトガル以外の前者4地域をみよう。

表1：諸地域におけるストックの変遷（男の名）

オビエド			レオン			ブルゴス属域			バルデゴビア		アロカ		
期間	ス	キ教	期間	ス	キ教	年	ス	キ教	ス	キ教	期間	ス	キ教
			876-925	92.5	100	875			—	18.2	901-1000	92	1.5
						900	100	—	90.9	40.0			
						925	100	25.0	90.9	0.8			
901-1000	69.6	—	926-950	73.1	48.5	950	26.3	18.9	71.4	21.0			
			951-975	80.7	31.6	975	28.6	18.1	43.5	21.1			
			976-1000	69.0	53.1	1000	34.5	17.9	35.7	10.0			
1001-1050	45.5	9.0	1001-1025	54.8	37.8	1025	47.6	24.6	41.7	22.7	1001-1050	100	
			1026-1050	49.2	55.2	1050	37.0		58.8	9.3			
1051-1100	15.1	37.5	1051-1075	52.2	60.4	1075	20.8	35.7	52.6	19.3	1051-1100	88	13.0
			1076-1100	33.3	86.4	1100	20.0	22.5	32.3	22.5			
1101-1125	17.0	46.5	1101-1125	36.7	82.9	1125	34.5	67.0	28.6	20.5	1101-1130	40	17.0
1126-1150	12.6		1126-1150	38.6	88.4	1150	21.3		66.7	21.7	1131-1160	29	29.5
1151-1175	12.9	42.0	1151-1175	27.0	79.7	1175	19.2	57.7	66.7	66.5	1161-1190	30	33.5
1176-1200	11.4		1176-1200	16.7	83.3	1200	11.6	63.8	14.9	70.7	1191-1220	18	37.5
											1221-1250	21	47.5
											1251-1280	36	45.0

出典：オビエド：Suárez Beltrán, 1995, p. 124, 132、レオン：Martínez Sopena, 1955, p. 174、ブルゴス属域：García de Cortázar et al., 1955b, p. 243-344、バルデゴビア：García de Cortázar et al., 1955a, p. 221、アロカ：Durand, 1995, p. 120の各頁より作成。アロウカ欄の1251-1280はグリジョでの値。

ブルゴス属域のストックは、資料における名当りの人数表示を、100人当りの名の数に変換。

キリスト教系名割合は、オビエド資料3-6%、6-9%、9-12%、12-15%、15-18%の表示を各4.5、7.5、10.5、13.5、16.5%として、アロウカ資料0~1、1~2、2~5、5~10、10~20%の表示を各0.5、3.5、7.5、15として算出。また、ブルゴス属域の1025、1125、1150年はサンプル数が僅少（各55、39、52）のため、1025と1050年、1125と1150年を合せて算出した。

レオンの875-925年については、サンプル表に挙げられる21の名のうち、フェリックス3件のみのためキリスト教系名が100%となったので、考察外とする。

バルデゴビアの年区分は、ブルゴス属域の区分に準ずる。

オビエドは9世紀以前の史料に欠ける。10世紀のストックは70であるが、サンプル名の85%は1回の使用であり、まだ圧縮ははじまっていないと解釈されている (Suárez Beltrán, 1995)。しかし、レオンで10世紀第2四半期に92.5から73.1へ21%減少して70台になったことは、圧縮がはじまっていたことを示しているので、集中は始まっていないにせよ、王国の都オビエドが一定の圧縮をレオンより早くに経験していたとしても不思議ではない。レオンはその後(914年)首都となり、移入民効果と思われるストック増(80.7)はあるが、世紀末にはふたたびオビエドと同レベル(69.0)に下がる。同時期(950年)、バルデゴビアもレオンと同程度の減少率(21.5%減少、90.9から71.4に)を示す。しかし、同時期におけるブルゴス属域のストック減は著しい(26.3)。その後も低レベルがつづく。これはなにに由来するのだろうか。半島北部の「命名革命」の動向を総括したマルチネス=ソペナ(1996)によれば、ピレネー域の共同体は狭い空間のため早期から一定の名が繰り返し用いられ、ストックが限られていた。そのためナバラ・リオハ地域では早くも10世紀から二要素システムの採用とストック圧縮がみられ、この動向がカスティーリャに伝播されたという。そうであるならば、ブルゴスはカスティーリャ最東部にあって、これら隣接地から影響を受けたことになる。

第二段の圧縮は、中世前期の通常値(80~90)を突如半減させる大減少である。バルデゴビアでは早くも975年に生じている(43.5)。この早期の減少はブルゴス同様、ナバラ・リオハ地域の影響ないし、エプロ河・ドゥエロ河上流域への入植による人口減少に起因するのかもしれない。逆に、11世紀半ば以降は1025年から4割ほど増加して58.8、52.6となる。この増加は、ピレネー以北からの移入民に由来しよう。当時サンティアゴ巡礼熱が西ヨーロッパで高まり、ピレネー以北から巡礼者・移民(多くはフランス人のため「フランコ」と称された)が大量に半島に来た。彼らだけで新たな町(たとえば、ピレネー越え2ルートの合流点プエンテ・ラ・レイナからエプロ河に至る途中のエステーリャ)を創設するほど、定住する外国人が多かったからである。バルデゴビアの史料は、バイヨンヌ(フランス)から半島に入る海沿いルートが、ピレネー越えの2ルートと合流するブルゴスに至る巡礼路(サン・セバスティアン~ビトリア~ミランダ・デ・エプロ)をすっぽりカバーする。そのため、この地域に定住化した巡礼者・移民が多く含まれていると思われる。ブルゴス属域にしても11世紀前半にはストックが前世紀平均の6割増し(47.6)となる。同地の史料は出身地を示す補足表記から国内外から移民が多数あったことを示しており(García de Cortázar, 1995b)、バルデゴビアとブルゴス属域における11世紀のストック増は移民効果によるものとみなせる。他方、オビエドとレオンはこの大圧縮を11世紀前半に経験し、おのおの45.5、49.2となる。

第三の圧縮は、オビエドのばあい11世紀後半に生じ、ストックは50年前のわずか3分の1(15.1、減少率約67%)にまで落ち込む。さらに1200年には限界レベル(11.4)に達する。この急激な圧縮は、レオンへの遷都による人口の大減少に起因しよう。新都レオンが各地から新たな移

民をつぎつぎに迎え入れ、世紀半ば以降に一時ストックを増加させたのとは対照的に、人口減少とともにストックも減少していくなかで、さらに後段でみる、少数名への集中傾向が相乗して、圧縮を尖鋭化させたのであろう。極度の圧縮が加速的に進行したこのオビエドとは異なり、レオン、バルデゴビアは同世紀後半以降に第三の圧縮を経験するが、つねにオビエドの2～3倍を維持し（同時期の平均は各42.8、42.5）、それ以降の減少もゆるやかである。両地域がオビエドの15レベル（11世紀後半）に達するのは、おのおの12世紀第4四半期、1200年であり、およそ100年遅い。一方、当初から低いストック値で、他と異なる動向を示していたブルゴス属域は1075年に同世紀前半のストック（平均42.3）が半減する（20.8）。それ以降は他地域と類似の推移を示し、1200年にはオビエドと同レベルまで低下する（11.6）。先述のナバラの影響にくわえ、巡礼路の合流点として人的流動性がきわめて高かったことも、ストックの限界化になんらか影響しているのかもしれない。

アロウカ（図1の12）のあるレオン域ドゥエロ河下流左岸域は、レオン国王主導のもとで入植が進められ、10世紀前半にポルトガルと称されるようになった。伯領となるが、当初から独立志向が強く、歴代伯はフランス諸侯と婚姻関係をむすぶなどして王国から政治的距離を置くとともに、言語など文化的にも差異化を図ることに腐心し、12世紀初頭には王国として独立を果たす。この地域には地域北のガリシア人と、フランスから呼び寄せられた大量の移民が入植した。さまざまな地域からの移民で構成された当地が各地固有の名によって豊富なストックをもったことは、11世紀前半のストック値100が物語る。各人がすべて異なる名をもっていた状態である。こうした入植地特有の事情から、旧来地域でストックが半減していた10世紀末から11世紀をとおして、アロウカではストックの圧縮は生じなかった。しかし12世紀にはいり、突如ストックは半減し、以後レオンと類似した数値となる。旧来地域における命名動向の影響を受けるようになったためとみなせる。

以上の5地域の比較から、次の諸点があきらかになる。各地域固有の事情から、ストックの圧縮時期・程度には差がある。圧縮には一般的に三段階あり、第一段は旧来地域ではおおむね10世紀半ばからはじまる2割ほどの減少、第二段は10世紀末～11世紀前半における半減に近い急激な大圧縮、第三段はそれ以後漸減し、12世紀末に極限に至る。また、入・出移民はそれぞれストック増減に寄与し、入植地では大量の流入期にストック減はほとんどなかったが、12世紀以降は他地域に準じ、圧縮が一挙に進行した。1200年以降は史料に欠けるため、動向は不明であるが、例外的に13世紀の資料があるポルトガル域のストックは1221～1250年に21（アロウカ）、1251～1280年に36（グリジョ）に増える。ほかの4地域（とりわけオビエドとブルゴス属域）でも12世紀末時点のストックがほぼ限界レベルであることからすれば、13世紀には12世紀末以上の圧縮はなかったとみてよいであろう²。

II. 初期現象としての少数名への集中

1. キリスト教系名の伸張

うえてみたように、10、11世紀以降どの地域もストックの圧縮という、それ以前にはなかった現象を経験した。では、なにゆえに圧縮が生じたのだろうか。この問いに解を出すひとつの手がかりは使用名の変化をみることにあろう。当時は西欧全般において民衆レベルでのキリスト教化が進行した時代であり、一般に「名のキリスト教化」もしくはマルティネス=ソペナ（1996：68）のいう「〈カトリック〉式命名」という現象が生じていた。圧縮とキリスト教化の関係を知るためには、ストックの量的変化と質的变化を詳しく検証する必要がある。しかし、すべての地域で双方の検証が可能な史・資料が整っているわけではない。前節でみた5地域は、この条件にほぼ見合う地域なのである。以下に、うえにみたストックの量的変化とキリスト教系名の伸張とのかかわりをみよう。表1の太字数字が、該当年・期間のサンプル中に占めるキリスト教系名の割合である。

オビエドの使用名の推移を示す資料（Suárez Beltrán, 1995）は大雑把であり、17の男子名が1001～1200年を50年刻みで、0～3%、3～6%、6～9%、9～12%、12～15%、15～18%として図式化されているにすぎない。各4.5%、7.5%、10.5%、13.5%、16.5%として割合を算出したため概数にとどまるが、一応の傾向は把握できよう。11世紀前半、キリスト教系名はわずか9%であるにもかかわらず、第二段の大圧縮が生じている（69.6から45.5へ）。これは、首都移転に起因するストック減が、キリスト教系名の普及より先行していたことを示す。同世紀後半の第三段の圧縮（15.1へ）はキリスト教系名の急増（9.0から37.5へ）と連動しており、以降1200年まで両者は並行して進む。レオン・カスティージャの他の地域のようにキリスト教系名が過半に至らなかったのは、西ゴート王国再興の夢を託したアストゥリアス王国誕生の地であり、12世紀後半においてもゲルマン系名（ゴンサロ、ロドリゴ、アルバロなど）が根強かったからである³。

バルデゴビアでは、875年以降1150年まで、おおむね20%ほどで推移している。ところどころの揺れは、サンプル数の少なさに起因しよう⁴。ストックが975年に第二段の圧縮をみた（50年前の半分：43.5）ことは、キリスト教系名が1175年⁵にサンプル（176件）の3分の2（66.5）まで急増する、はるか200年前から圧縮がはじまっていたことを物語る。ただし、1200年の極限の圧縮とキリスト教系名の勝利は並行している。ブルゴス属域においても、最初のストック減少はキリスト教系名の低レベル時代から進行しており、両者間に関連は認められないが、12世紀半ばのストック減（21.3）はキリスト教系名の急増（67.0）とあきらかに連動している。11・12世紀交までキリスト教系名が少なかったのは、フランコ移民のゲルマン系名に起因しよう。

アロウカは、以上の地域とは少し様相を異にする。13の名についてサンプル中に占める割合が概数で示される（0～1、1～2、2～5、5～10、10～20%での図表示のため、各0.5、1.5、3.5、7.5、15%として算出）。11世紀前半までキリスト教系名はほとんどなく（1.5%）、同世紀後半から

1130年までは多少増えるものの、10%台にとどまる。その後は3割台、1221年以降ようやく5割近くになる（世紀後半はアロウカ史料欠落のため、グリジョ史料）。ゲルマン系名が期間をとおしてきわめて根強い。前述のように入植者の出身地はおもにガリシアとフランスであり、ガリシアはスエヴィ族を征服したのちに西ゴート人が大挙入植した地方だったため、結果的にポルトガルは半島のどこよりもゲルマン化したのである（Martínez Sopena, 1996）。ゲルマン系名が根強く採用されつづけ、グンディサルヴス⁶は13世紀後半でさえペトルスと同程度（10～20%）を占めた（Durand, 1995）。しかし、少数の新しいキリスト教系名（1130年以降ペトルス、12世紀末からイオハネス、マルティヌス）が増していく。あきらかに、旧来地域の影響である。この新キリスト教系名御三家（ペドロ、フアン、マルティン）はレオンでは1075年からはじまり、12世紀初頭に確立し（表3参照）、ブルゴス属域でも12世紀前半からはじまり、1200年に確立している。レオン・カスティーリャ域全体におよぶ、この既存の文化的潮流が後発の入植地ポルトガル域に流れこんだのである。

レオン資料は聖・俗界を区分しており、他地域の資料からは窺い知ることができない聖職者の動向がわかる。彼らはきわめて早期からキリスト教系名を採用していた。資料から算出すると、875～950年に早くも55.6%にのぼる。家産の保全から聖界入りを運命づけられて、そのように命名されたか、聖界入りに際して改名したためであろう。俗人より50～100年も早く、9世紀末からペドロ、フアン、ドミンゴを、10世紀後半からミゲルを採用した（表2）。ドミンゴの名が急増した理由を、ガルシア・デ・コルタサル（1995b）は聖ドミンゴ・デ・シロス（1000頃－1073年）か聖ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ（1019頃－1109年）への崇敬に因む、もしくは当時すでによくある名だった故かもしれないとする。前者への崇敬が死直後から各地に広まり、後者は生前から国王の賞賛を賜っていたことからすれば、11、12世紀の急増は彼らに由来するといえるが、それ以前の採用はローマ時代（3世紀末）の殉教者ドムニヌスに因むと解釈するのが妥当であろう。

宗教界におけるキリスト教系名の早期採用は、聖職者が宗教活動のみならず政治面でも重要な役割（たとえば、国王の諮問委員）を果たしていたために、民衆の命名行動に大きな影響を与えたと考えられる。俗界でもほかの地域にはみられないほどキリスト教系名が当初から大量に5割前後（925～950年48.5%、975～1000年53.1%）使用されていた（表1）。それは、おおむね925～1000年に生じた第一段の2割程度のストック圧縮と同時代であり、名の選択幅を多少狭めながら、半数がキリスト教系名を採用したことになる。951～975年の一時的な減少（31.6%）は、ストック増加（80.7）から判明するように、遷都まもないこの時期、さまざまな出自の移入民によって相対的にキリスト教系名割合が減少したためとみなせる（同時期、アラブ系名31.6%、ゲルマン系名25.9：Martínez Sopena, 1995より算出）。

11世紀になると、1075年までストックは前時代より減少しつつも（第二段）、平均52ほどで一定であるが、キリスト教系名の方は第3四半期には60.4%（第1四半期からの上昇率6割）ま

で増加する。選択幅はほぼ同じであるが、より多くの人々がキリスト教系名を採用した。キリスト教への関心や聖人崇敬が次第に高まっていったことが背景にある。1076年以降12世紀前半までは、第三段のストック圧縮期にあたり（52.2から33.3へ36%減少）、キリスト教系名の4割以上の急増（60.4%から86.4%へ）と合致する。12世紀後半も第四段のストック圧縮とキリスト教系名の伸張が連動しながら、ともに限界値に近づく（ストック16.7、キリスト教系名83.3%）。当時整備・拡充されていった教区教会網とともに、洗礼時にごく限られた聖人名のなかから選択して命名することが常態化していったことを物語る。こうした命名動向は洗礼のあり方と密接にかかわってよう。11、12世紀まで洗礼は長じてから受けるものであり、命名とむすびついていなかったが、12世紀ころに新生児の洗礼が一般化し（Billy, 1995）、同世紀末から命名が洗礼儀式の一部となって（Krawutschke et al., 1995）、教会に取り込まれていったからである。

レオンに近いエバナも、類似したストックの推移を呈する。当地方については使用名リストが資料にないが、9世紀にはサンプルの90%の男が異なる名をもっていた（サンプル中1回登場の名の割合）という。10世紀にはそれが50%に激減するが、ストックはまだ66.7ある。11世紀には25%、40に、1125～1150年には10.2%、20に、1175～1200年には4.6%、12.5へと減少した（Montenegro Valentin, 1995：名あたり人数から換算）。P. シャレイユ（2002）によれば、圧縮は集中の原因かもしれないし、結果かもしれないとして、ふたつの現象がかならずしも並行して起こったと解釈すべきではないという。なるほど、軽度の圧縮の背後で集中がかなり進行していた10世紀のリエバナでは集中と圧縮の足並みが揃っていたとはいえないが、しかし11世紀以降の集中と圧縮の連動性は疑いえない。

2. 集中：「新しい名」の選択と「古い名」の用捨

以上の分析から、第一・第二段の圧縮は（聖職者の影響が強いレオン以外）キリスト教系名の相当数の採用より先行したが、第三段の極限の圧縮は（レオンも含め）キリスト教系名の圧倒的優位と連動していたことが判明した。こうした状態をさらに鮮明にするためには、採用名自体の質をみる必要がある。レオン資料は聖界・俗界別に、それぞれ20、21の名を、各50年、25年間隔で収録している。ここではそのなかから10の名の推移をみよう（表2）。西ヨーロッパ共通の使徒・教皇 {ペドロ（ペトロ）、ファン（ヨハネ）}、大天使ミゲル（ミカエル）、キリスト教初期の殉教者 {ドミンゴ（ドミニクス）、マルティン（マルタン）}、サルバドール（救世主）、西ゴート時代に崇敬されていた聖人（ペラヨ、フェリックス）、ゲルマン系名（フェルナンド、フロイラ）、アラブ系名のシティである。同資料にラテン系名はまったく登場しない。

聖職者と俗人に多少の時間差・程度差はあるが、全体的には11世紀から12世紀にかけて潮目が変わった様相が見てとれる。あきらかに、それ以前には採用がほとんどなかったペドロ、ファン、ドミンゴ、ミゲルなど、「新しいキリスト教系名」に集中度を高めていっている。ことに、

表2：レオンにおける男子名サンプルに占めるキリスト教系名の割合

時期		876	926	951	976	1001	1026	1051	1076	1101	1126	1151	1176
		925	950	975	1000	1025	1050	1075	1100	1125	1150	1175	1200
ペドロ	聖界	11.1		11.8		4.3		20.0		3.7		29.2	
	俗界	0	9.4	0	2.3	0	5.3	18.6	21.6	16.9	25.6	25.6	24.1
ファン	聖界	16.7		11.8		12.8		0		14.6		12.3	
	俗界	0	6.3	5.3	11.4	1.9	3.9	18.6	7.8	15.4	11.6	13.5	12.7
ドミンゴ	聖界	5.6		5.9		10.6		10.0		2.4		20.0	
	俗界	0	0	0	8.6	3.8	18.4	2.3	21.7	10.8	10.5	9.0	10.2
ミゲル	聖界	0		11.8		12.8		3.3		0		0	
	俗界	0	0	0	2.3	3.8	3.9	0	4.9	7.7	3.5	6.8	5.9
サルバドール	聖界	0		0		0		0		0		0	
	俗界	0	0	0	5.7	5.6	6.6	2.3	3.9	0	1.2	0	0
ペラヨ	聖界	5.6		0		0		16.7		9.8		3.1	
	俗界	0	0	0	5.7	3.8	6.6	7.0	6.9	6.2	15.1	9.0	7.4
フェリックス	聖界	5.6		0		6.4		3.3		0		1.5	
	俗界	100	21.9	10.5	5.7	1.9	2.6	0	2.0	3.1	0	0	0
フェルナンド	聖界	0		5.9		4.3		0		2.4		7.7	
	俗界	0	0	0	0	0	2.8	2.3	1.0	3.1	1.2	5.3	6.2
フロイラ	聖界	5.6		17.6		10.6		3.3		0		0	
	俗界	0	9.4	10.1	5.7	1.9	2.6	4.7	2.9	0	2.3	0.8	0.3
シティ	聖界	5.6		0		6.4		3.3		0		0	
	俗界	0	3.1	10.5	11.4	13.2	17.1	7.0	5.9	4.6	0	0	0

出典：Martínez Sopena, 1995, pp. 174, 177 より作成。

民衆間では11世紀後半以降、ペドロへの集中は著しい。ロドリゲス=バスケス(1995)によれば、典礼の変更や教皇権の強化などをもたらしたグレゴリウス改革(1075年)と関連づけられるべきとする。この改革は12世紀をとおしてゆっくと西ヨーロッパに広がり、イベリア半島には100年後の12世紀末の2、30年に届いたという。たしかに初代ローマ教皇ペドロの名が12世紀後半に聖職者間で急増した(前期3.7%から29.2%へ)のは、教会組織を介してその改革が波及したことを示すものであろう。しかし、俗人間では改革以前の1051~1075年に急増しており(5.3%から18.6%へ)、また聖職者間でも同時期急増(4.3%から20.0%へ)していることは、グレゴリウス改革波及説のみからは説明できない。

興味深いのは、サルバドールの推移である。聖界の採用が全期間でゼロは意外であるが、俗人が10世紀末から採用しはじめたことは、まさしく中世盛期にはじまるキリスト教の民衆レベルでの浸透を物語っている。では、なぜわずか100年ほどで消滅にむかったのだろうか。地中海世界では太古から大地母神信仰があり、古代の東地中海地域においては、マリアが2世紀から「キリストの母」と呼ばれ、5世紀(431年エフェソス公会議)に「神の母」という公式呼称が認められたことによって、マリア崇敬を介してキリスト教が受容されていった側面が強いという(竹

下、1998)。中世盛期の西地中海地域でも、民衆は同様の信仰行動をとったのではないだろうか。同じレオン資料が挙げる女の件数は僅少である（全期間のサンプル総数 341 件のうち、使用名リストに登場するのは 175 件、27 の名）が、マリア名の推移をみると、10 世紀後半、11 世紀前半、後半、12 世紀前半、後半はそれぞれ 1、4、7、19、19 件（Martínez Sopena, 1995）であり、12 世紀にはいってあきらかに急増し、他の名をはるかに凌駕している。マリア名の急増期とサルバドールの消滅期が一致することは、キリスト教をイエス（サルバドール）信仰として一旦は教化された民衆が、またたく間に信仰の対象をマリアに移動させていったことを示唆する。「神の母」マリアの存在によって心の深奥で脈々と受け継がれてきた大地母神信仰が呼び覚まされ、神より身近な存在として欣喜して受容したことは想像に難くない。近世をとおり現代までもマリア崇敬が西地中海、ことにイタリアとともにスペインにおいて重要部分をなす民衆のカトリック信仰のあり方が、その受容期の 12 世紀早々に方向づけられたことになる。この傾向は翌 13 世紀以降さらに強まっていく。12 世紀前半以降に半島の諸所に設立されたシトー派修道院や、13 世紀初頭から民衆のなかに入って説教したドミニコ会やフランチェスコ会などの托鉢（説教者兄弟）修道士たちがマリア崇敬をさらに広めていったからである。

こうしたキリスト教の俗界における新たな広まりに呼応した、西ヨーロッパ共通の大聖人名の躍進とは対照的に、伝統的な地方聖人名はそのほとんどが消滅傾向を示す。そもそも地方聖人名の採用は、8 世紀初頭に半島の大半がイスラーム圏に編入されたことによって、結果的に西ヨーロッパ一般にくらべ早期に促されていた。アル=アンダルス（イスラーム支配下の半島地域）に残留したキリスト教徒（モサラベ）の一部がことさらイスラームを侮辱して自主殉教する風潮が 9 世紀半ばの一時期におこり、そうした多数の男女殉教者の名（ペラヨ、セルバンド、アルヘンテア、フスタなど）をアストゥリアス王国の人びとは好んで採用したという。また、西ゴート教会が崇敬した聖人（フェリックス、シブリアーノなど）の名も命名された（Martínez Sopena, 1995）。こうした古いキリスト教系名のひとつ、フェリックスは 10 世紀、ことに前半まで大流行していた（前半 21.9%、後半 10.5%）が、10・11 世紀交以降はあきらかに衰退し、12 世紀にはほとんど消滅する。ペラヨの名も、俗人間では根強く 1200 年まで一定数の採用が維持されるが、聖職者間では 12 世紀以降は消滅傾向にある。この名はリエバナ（図 1 の 9）では修道院の守護聖人となって 11 世紀から逆にふえ（Montenegro Valentín, 1995）、アロウカでは 13 世紀半ばまで存続するが、前者より東、エプロ河上流域にいたる諸地域では、すくなくとも上位 20~30 の名のリスト（García de Cortázar et al., 1995a, b）には登場しない。ペラヨ名の採用は、8 世紀初頭のイスラーム侵攻時に北部に避難した西ゴート貴族と聖職者に抱かれたゴート主義（王国の末裔・後継者意識）の影響が及んだ西部地域に限られたのかもしれない。これら地方聖人名の衰退・消滅には、ローマ主導による典礼の「均質化」が無視できない影響をあたえているという（Martínez Sopena, 1995）。西ゴート式典礼の廃止にともない、それらの名は古臭く、西ヨー

ロッパ共通の大聖人などの名の方が新鮮で魅力的に感じられるようになったのであろう。地方的聖人が新しい大聖人たちに打ち負かされる現象が西ヨーロッパ中で例外なくみられた (Bourin, 1989) のは、こうしたローマ式典礼への統一と強化、ならびに、先に言及した新しい説教形態による民衆の教化という現象を共有したことに帰因しよう。

ゲルマン系名においても、キリスト教系名同様、ふたつの相反する流れがあった。中世前期には社会階層によって命名系統が異なっており、6世紀初頭の西ゴート人による興国以降、支配層はゲルマン系名を、被支配層はローマ属州時代以来のラテン系名を名乗った。しかしレコンキスタの進展にともない、平民もロドリゴやゴンサロのようなゲルマン系名を採用するようになって、名の階層格差が消滅する。それに圧されて、ラテン系名がほとんど採用されなくなる。その契機となったのが、10世紀末に創設された平民騎士制度であるにちがいない。軍馬・武具を調達できる平民に免税特権などの準貴族待遇を与えて、戦時に徴兵する。アル=アンダルスとの実質的戦闘がはじまる11世紀以降、そうした「平民騎士」が人びとの身近な憧れとなっていったことは想像に難くない。時代が進むにつれて、彼らの政治的・経済的・社会的特権は大きくなっていき、服飾においても金色の馬衣・鎧・轡やマントへの高級毛皮の縁取り、妻・娘にも毛皮が無制限に認められた (1252年: 芝, 2001)。騎馬像で描かれることがあったが、そうした平民の騎馬像は西ヨーロッパ唯一の例外であった (Menéndez Pidal de Navascués, 1996)。

またフェルナンド名が、フェルナンド1世によるレオンとカスティーリャの王国統合 (1037年) 以降に平民が採用しはじめたことは偶然ではないであろう。ミッテラウアによれば、中欧・西欧では封建制下、擬家族的絆を象徴するものとして10世紀以降国王の名がひろく普及し、名による一種の「封建的統合」がなされたという (Mitterauer, 1996)。封建制が確立しなかった地中海の大方の地域同様、借地契約が優勢な当地域にはそうした擬家族的絆は存在しなかったが、偉業をなした国王名にあやかる命名自体は普遍的現象といえる。また、貴族には祖父の名を孫に命名して家族アイデンティティを維持する習慣があり、その習慣がストックのキリスト教化に一定の抵抗を示した、とデュランは指摘する (Durand, 2002)。特定の名 (1~4、5個) を代々つける習慣もあり (Krawutschke et al., 1995)、有力家族におけるこうした系譜意識の強まりはゲルマン系名の堅持とともに、集中とストック減の促進要因となったであろう。

一方、同じゲルマン系でありながら、フロイラはあきらかに衰退傾向にあり、12世紀後半にはほとんど消滅する。フロール (花) に似た優しげな響きとロマンス語の女性形語尾-aに通じる音が、勇猛な騎士を志向する時代の空気に合わなかったのかもしれない。また、表の最後尾のシティは、10世紀以降史料に登場したアラブ系名が13世紀に消滅していった典型例である。ムスリム捕虜やアル=アンダルスからのモサラベ移民がこの時期までに、北部キリスト教社会に同化していったことを物語る。

レオン資料から判明するおもな命名動向をまとめれば、使徒、教皇、大天使などの「新しいキ

リスト教系名」の採用が9、10世紀に聖職者からはじまり、俗人も数十から100年遅れて10世紀末以降に採用したこと、なかでも、11世紀後半以降のペドロへの集中が著しいこと、「古いキリスト教系名」やアラブ系名、時代にそぐわない響きのゲルマン系名が12世紀前半に消滅していったこと、ゲルマン系名の一部が11世紀前半以降あらたな支持を得はじめたことなどである。このように、11世紀中葉以降に急増する少数の新たな名は、12世紀初頭以降、ラテン系名を筆頭とする、一群の名の用捨⁷とひきかえに、その集中度をますます高めていったことになる。

これまでにみたストックの圧縮と名の盛衰のかかわり、および集中の程度をさらに、表3に示した最頻5名の推移を追って確認しよう。

表3：レオンにおける最頻名順位と割合の推移（俗界）

順位	926-950		951-975		976-1000		1001-1025		1026-1050		1051-1075				
1	フェリックス	1	フェリックス	1	フアン	1	ベリエイテ	1	ドミンゴ	1	ペドロ				
	21.9		ディエゴ		ディエゴ		17.0		18.4		フアン				
2	ペドロ		ベルムド		シティ	2	シティ	2	シティ						
	ロドリゴ		シティ		11.4		13.2		17.1						
	フロイラ		10.5		4		ベルムド		3		ディエゴ	3	サルバドル	3	ディエゴ
5	エステバン	5	フロイラ		ガルシア	4	ゴンサロ	4	ペラヨ	5	ベリエイテ				
	9.4		10.1		8.6		9.4		6.6		9.3				
	ガルシア														
	ベルムド														
	6.3														

順位	1076-1100		1101-1125		1126-1150		1151-1175		1176-1200
1	ペドロ	1	ペドロ	1	ペドロ	1	ペドロ	1	ペドロ
	ドミンゴ		16.9		25.6		25.6		24.1
3	マルティン	2	フアン	2	ペラヨ	2	フアン	2	フアン
	12.7		15.4		15.1		13.5		12.7
4	フアン	3	マルティン	3	フアン	3	マルティン	3	マルティン
	7.8		13.8		11.6		9.8		11.8
5	ペラヨ	4	ドミンゴ	4	ドミンゴ	4	ドミンゴ	4	ドミンゴ
	6.9		10.8		マルティン		ペラヨ		10.2
		5	ミゲル	5	10.5		9.0	5	ペラヨ
			7.7						7.4

出典：Martínez Sopena, 1995, pp. 174, 177 より作成。

926～975年をみると、古い聖人名フェリックスを筆頭に、10%前後を獲得する名が4、5個あり、伝統名のあいだですでに集中が進行している。この期間はストックが第一段の軽い圧縮を示した時期（表1）にあたり、集中と圧縮は相互に関係していたことが窺える。10世紀における伝統名間での集中は、ほかの地域でも確認できる⁸。とはいえ、まだ集中は後年ほど著しくなく、さまざまな系統の多数の名がほぼ同格で登場しており、人びとの嗜好はまだゆるやかに分散していたといえる。1001～1025年にアラブ系のベリエイテ、シティが例外的に1位、2位を占めるが、

この期間のサンプル件数が少ない（53件）ことを勘案すると、元の史料に偏りがあった可能性がある。1001-1075年は伝統名（古いキリスト教系名、ゲルマン系、アラブ系など）が依然として強い一方、ドミンゴの第一位への躍進（1026～1050年）が示すように、新しいキリスト教系名と聖俗伝統名の優位が入れ替わり、前者が後者を凌駕していく変換期にあたる。1075年以降はそれまでの地方聖人やアラブ系を振り落とし、新キリスト教系名（ペドロ、フアン、マルティン、ドミンゴ）が一貫して1～4位独占し、なかでもペドロへの集中は著しい。この大転換期の1075-1100年は表1でみたように、ストックが第二段の圧縮後、さらに圧縮度を高めて30台に落ち込む時期であり、同時にキリスト教系名が85%前後に急増する時期にあたる。つまり、住民の大多数が限定された少数の新聖人名を集中的に選択することによって、ストックの減少が生じたことになる。「新たな名」の選択的採用と「古い名」の用捨が相乗して、ストックの極度の圧縮と少数の「新しいキリスト教系名」の絶対的集中が生じたのである。この大転換をもたらしたキリスト教系名への集中は、半島のほぼ中央に位置するトレドの奪還（1085年）とそれにつづくアルモラビデ（ムラービト）の侵攻によって戦闘が2、30年つづいた時期にあたり、キリスト教徒であることがそれまでより強く意識されたことに由来するのかもしれない。

Ⅲ. 二要素命名システムの誕生：圧縮・集中とのかかわり

中世前期に単名で事足りていた命名法は、中世盛期以降複雑化していき、現代につづく姓の出現をみるにいたる。その最初の変化は単名への補足要素の添付であり、高位職・身分（たとえば、修道院長、伯爵）、別名・通称、家族関係（～の息子・娘・妻）などを表した。ついで父称（父の名に因む）、地名、あだ名、職業名などが次第に独立した命名要素として単名と並置されるようになり、ここに二要素システムが誕生する。単名から二要素システムへのこのプロセスは一律でも直線的でもない。単名や単名＋補足要素の命名法は社会集団によっては近世までも維持された。しかし、ほとんどの西ヨーロッパ社会は中世盛期から後期にかけてこの変換を経験した。この大変革がそのほとんど全域でほぼ同時期に生じたことは、各地域が固有条件をもちつつも、共通ないし類似した社会的・文化的変動がおおむね全域にわたっていたことを示唆する。

この姓の出現と名における初期現象（ストックの圧縮と少数名への集中）とのかかわりについては、研究者間で意見が分かれる。たとえば、ミッテラウア（Mitterauer, 1996）によれば、中欧・西欧での主君と聖人の名の同時的採用がストックを激減させ、それが劇的にヨーロッパの命名システムを変えたという。それにたいしてブーラン（Bourin, 2002）は、同名者の増加を新しい命名法出現の、すくなくとも主因とみなすのは間違っているとし、むしろ、姓の出現によって、高い評価の名を多くのひとが分かちもつことが可能になったという側面もあるので、同名者の増加と二要素システムの出現は、同時展開のスパイラルのプロセスと捉えるべきとする。イベリア半島についても、二者は原因・結果の関係ではない（Zimmermann, 1996）、同時並行的現

象ではあるが相互に独立的である (Suárez Beltrán, 1995) といった見解、あるいは、ストックが相対的に狭められたため必要に迫られて二要素システムが登場したとみなすのがよいだろうとする暫定的な意見 (Martínez Sopena, 1996) などが示されている。しかし、一般化できるほど論拠が十分に提示されているとはいいいがたい。以下に、うえで試みたストックの圧縮と名の集中の量的・質的分析の結果を勘案しながら、それらの初期現象と姓の出現とのかかわりをみよう。

まず、二要素システムの広がりをもどのように測るのか、いつの時点をもって新しい命名法の勝利とするか、基準が必要となる。これには二通りある。一般的には二要素システムが単名を凌駕する時点、つまり双方がサンプルの 50% となった拮抗時点とみなされるが、単名が 20% まで減少する時点 (Suárez Beltrán, 1995; Bourin, 1989) とする意見もある。そこでこれら二つの時点をおのおの拮抗期と確立期とみなして、前出の地域を含む半島北部西半分の諸地域について示したのが表 4 である。バルデゴビアはサンプル数に波があって移行期が捉えにくいいため、同地を含むエプロ河上流左岸域の資料で代替した。

表 4：単名から二要素システムへの移行時期

地域	拮抗時期	確立時期
ソブラド	1075	1150-1175
サモス	1100	(1200 以後)
エル・ビエルソ	1050	1225-1250
オビエド	975-1000	1051-1075
レオン*	1050	1075-1100
リエバナ*	1075-1100	1175-1200
エプロ上流左岸*	1150	(1200 以後)
ブルゴス*	1140	(1200 以後)
ポルトガル*	1101-1130	1250-1280

出典：ソブラド：Portela Silva et al., 1995, p. 31、サモス：González et al., 1995, p. 62、エル・ビエルソ：Rodríguez González et al., 1995, p. 91、オビエド：Suárez Beltrán, 1995, p. 131、レオン：Martínez Sopena, 1995, p. 176、リエバナ：Montenegro Valentín, 1995, p. 187、エプロ上流左岸：García de Cortázar, 1995a, p. 227、ブルゴス：García de Cortázar, 1995b, p. 251、ポルトガル：Durand, 1995, p. 119 より作成。

* 地域は二要素システム＋復姓、単名＋補足要素。

サモス、エプロ上流左岸、ブルゴスは、史料限度の 1200 年以前に単名は 20% まで低下していない。

大局的にみれば、拮抗期にはいるのが早かったのは、まず政治・文化の中心地であったオビエドとレオン、そこから相対的に近いエル・ビエルソとリエバナ、ガリシア地方のソブラドとつづく。逆に拮抗期にはいるのが遅かったのは、ポルトガル域、ブルゴス、エプロ河上流左岸域である。早く確立期にはいったのは順に、旧都オビエド、新都レオン、ついでソブラド、リエバナである。オビエドは史料づけられる 10 世紀ですでに 20% あり、同世紀末 (980 年代) には拮抗期に至り、1051-1075 年には確立期に至る (Suárez Beltrán, 1995)。10 世紀初めに都ではなくなったとはいえ、旧都として社会の複雑性がのこされていたと思われる。新都レオンも同様に早期に

拮抗期、確立期に至る。ソブラドはレオンから遠くに位置するが、レオンからア・コルーニャに通じる幹線道路上に位置するため、首都の動向が伝播しやすく、拮抗期とともに確立期も相対的に早かったのであろう。それにたいし、エル・ビエルソとサモスは山地であるため、人的流動性が弱かったことが確立期まで100～200年を要した理由であろう。他方、ブルゴスは先述のように、70キロほどの距離にあるラ・リオハの影響で、はや900年時点で二要素システムは20%を越える（García de Cortázar, 1995b）。しかしその後の進展はゆるやかで、エプロ左岸域同様、拮抗期・確立期に達するのが遅い。この2地域は史料限度の1200年までに単名が20%に落ち込まないため、正確な確立期は不明であるが、カスティージャ域では1200年ころに「優勢」となるとされる（Martínez Sopena, 1996）ので、13世紀早々には確立期に至ったのであろう。ポルトガルの遅さは後発の入植地であったことに由来する。

こうした地理的・地勢的観点からすると、オビエド・レオンから東西方向にむかって、おおむね同心円的に新しい命名システムが普及し、確立していったという仮説が成り立つ。ブルゴスが東地域から早期に導入したにせよ、全体的な普及に時間を要したことは、おおむねこの波及動向に沿ったとみなせる。

表5：集中度（最頻名上位5個の人口に占める割合）

時期	レオン	オビエド	年	ブルゴス属域	バルデゴビア	時期	ポルトガル
926-950	56.4		950	48.2	66.1	900-1050	27.1
951-975	52.1		975	46.1	64.2		
976-1000	51.4		1000	50.5			
1001-1025	55.3	24.0	1025	41.2			
1026-1050	62.9		1050		62.4		
1051-1075	62.8	52.5	1075	45.0	48.3	1051-1100	77.3
1076-1100	70.6		1100	50.6	43.0		
1101-1125	64.4	52.5	1125	62.7		1101-1130	28.8
1126-1150	73.3		1150			1131-1160	30.2
1151-1175	66.9	49.5	1175	61.8	72.2	1161-1190	50.6
1176-1200	66.2		1200	63.8		1191-1220	50.6

出典：レオン：Martínez Sopena, 1995, p. 74、オビエド：Suárez Beltrán, 1995, p. 132(3-6%, 6-9%, 9-12%, 12-15%, 15-18%+ α の概算のため、各4.5, 7.5, 10.5, 13.5, 16.5%として算出。1000年以前は資料欠如)、ブルゴス属域：García de Cortázar, et alli, 1995b, p. 244、バルデゴビア：García de Cortázar, et alli, 1995a, p. 221、ポルトガル：Durand, 1995, p. 120より作成。

では最後に、こうした二要素システムの動向を、ストック圧縮および集中度（最頻5個の名が占める割合）⁹とのかかわりで具体的にみてみよう（表5）。そのブルゴス属域をみると、拮抗期（1140年代）は、ストックが第三段の圧縮期にはいり（1150年21.3に下落）、キリスト教系名が突如人口の3分の2（67.0%）に急増し（表1）、集中度が一挙に60台（62.7）に上がった（表5）時期とまさに符号する。表にはないが、サモスでは拮抗期（1100年）はストックの第三段の圧縮（44から30に低下：González et al., 1995）と一致し、ソブラドのばあい、拮抗期（1075年）

は集中度の急上昇（前期の22%から50%に上昇：Portela et al., 1995）と合致する。また、リエバナの拮抗期（1075-1100年）は、ペドロがサンプルの18.4%を占めて（Montenegro Valentin, 1995より算出）、はじめて最頻名に踊りでた時期（1075年）と重なる。レオンの拮抗期（1050年）はドミンゴが同じく18.4%を占めて第一位となった時期（1026-1050年）であり、同時にストックの第二段圧縮期（49.2：表1）でもあった。さらに、確立期（1076-1100年）は第三段の圧縮（33.3）と集中度の高まり（70.6%：表5）と新しい聖人名の急激な圧倒的勝利（86.4%：表1）と一致する。ペドロ、ドミンゴ、マルティン、フアンの4名だけでサンプルの63.7%を占める（表3）。エプロ河上流左岸域での拮抗期（1150年）は、それまでの伝統名ヌーニョに代わってペドロが第一位の座を奪う潮目の1125年（García de Cortázar et al., 1995a）からわずかに遅れるがほぼ一致する。1150年以降はそれまでの伝統名（ロペ、ゴンサロ、ロドリゴなど）に代わってマルティンが第2位に急浮上し、ペドロと合わせて3割（28.7%：Ibid.より算出）を占め、新キリスト教系名への加速度的集中の発端を画する。集中度が急速に高まった（バルデゴビアで72.2：表5）1175年から1、2世代のちに確立期をむかえることになる。

以上から、レオン・カスティーリャ地域においては¹⁰、ストックが激減し（圧縮以前の半減もしくは10～30へ）、かつ少数の新しい聖人名への集中が高まる時期に、二要素システムは拮抗期をむかえ、それらキリスト教系名の圧倒的優位期に新命名システムが確立したことになる。エプロ左岸域で新しい少数の聖人名の躍進が拮抗期の25年前からすでにはじまっていたことは、集中が1世代先行したことになる。さきに言及したように、同名者の増加と二要素システムの出現は同時展開のスパイラル的プロセスであるかもしれない（ブーラン説）が、どちらが契機となったかといえ、新しいキリスト教系名への集中であった可能性が大きい。

また、ポルトガル域アロウカでは、拮抗期（1101-1130年）はストックが88から一挙に40に激減する第二段の圧縮期（表1）とびったり重なる。この検証結果からすれば、コインブラ¹¹（アロウカの7、80キロ南：同時期、ストックは45から33に減少）の事例から、同名人の増加と二要素システムの出現は原因・結果ではないとするドゥラン（Durand, 1989）の見解はポルトガル域内においても一般化しがたいことになる。ポルトガルの個性的な動向は、恣意的差異化政策とガリシア地方の特性に起因する優勢なゲルマン系名によるキリスト教系名への抵抗、および旧来地域での確定的動向への遅参といった後発入植地の特性などに起因することが判明した。

おわりに

「命名革命」がはじまった中世盛期、それまで相対的に静的だった西ヨーロッパ社会は一気に流動化していった。イベリア半島でもドゥエロ河上流・下流域、エプロ河上流域への入植や外国人流入などによる人口の絶え間ない移動、「都市」や地縁共同体の創設・拡大にともなう社会の複雑化、民衆へのキリスト教の浸透、イスラームとの対峙、「平民騎士」制度など、社会を根底

から揺り動かす大変動がおきていた。社会生活はあらゆる分野において、そうしたさまざまな事象の複合的影響から免れることはできなかった。命名法もしかり。

その変革の端緒となったストックの圧縮と名の集中を量と質の両面で分析し、二要素システムの拮抗期と確立期を比較して判明したことは、最初の軽度の圧縮は伝統名間での集中に由来すること、移民の流入などによってストックと集中の関連が途切れることもあるが、圧縮は段階を追うごとに集中と密接にかかわったこと、ことに第三段の究極の圧縮と集中の契機となったのが新しいキリスト教聖人の名の採用と伝統名の用捨（ラテン系名、古いキリスト教系名、一部のゲルマン系名、アラブ系名）だったこと、二要素システムはストックの半減期と新しい聖人への集中中期に単名と拮抗するに至り、その確立期はストックの究極の圧縮と新しい聖人の絶対的優位期と合致したことである。初期現象から二要素システム誕生までの推移の背景にはさまざまな要因が絡んでいたが、なかでも最大の要因はキリスト教の民衆間への浸透であったといえる。西ヨーロッパのほとんどの地域でほぼ同時期に「命名革命」を経験した所以である。

-
- 1 レオン王国から 1035 年に独立したカスティーリャ王国は、その後宗主国との合併・分裂をへて 1230 年に最終的にレオン・カスティーリャ王国となる。
 - 2 半島以外の地、たとえばローマ市でも 1250 年時点でストックは 15~16 であった (Hubert, 1996)。
 - 3 西ゴート主義がゲルマン系名の採用をもたらした (Martínez Sopena, 1996)。
 - 4 900 年サンプル数 5 件、925 年 12 件、1000 年 35 件、1050 年 43 件。
 - 5 ただし、1125、1150 年のサンプル数が 5 件、23 件と少ないことから、これらの時点でもキリスト教系名は実際には各 34.5、22.5 より高かった可能性がある。
 - 6 レオン・カスティーリャ王国ではゴンサロ Gonzalo。王国では徐々にペドロ Pedro、フアン Juan、マルティン Martín など、名のロマンス語化が進んでいったが、ポルトガル域ではグンディサルヴス Gundisalvus、ペトルス Petrus、イオハネス Iohannes、マルティヌス Martinus のように、伝統的なラテン式が用いられていた。
 - 7 ブーランも、消滅ではなく、人気がなくなって廃れたとする (Bourin, 2002)。
 - 8 ブルゴス(市・属域)のばあい、950 年の最頻名ムニョ/ヌニョは 15.2%、バルデゴビアでもヌニョが 950 年に 19.3%、975 年に 18.3%まで集中した (García de Cortázar, 1995a,b, 239,221)。
 - 9 集中度をなにて表すかについて、研究者間で意見は分かれる。ブーラン (Bourin, 1996) は上位 12 の名が人口に占める割合とし、命名研究の方法論を論じたシャレイユ (Chareille, 2002) は 5 つの名とする。本稿が依拠する資料のサンプルには波があり、12 に達しないばあいもあるため、上位 5 つの名の合計がサンプルに占める割合とする。
 - 10 ガリシア地方のソブラドとサモスは使用名リストがないため不明である。
 - 11 ドゥラン (Durand, 1989) の研究によれば、コインブラの拮抗期は 1125 年前後、確立期は 1160 年であり、間隔がレオン同様、きわめて短い。アロウカよりあとでレコンキスタ (1064年)・再入植されたにも

かわらず、立地条件良好な主要都市となったため、急速に二要素システムへ移行したことを物語っている。ストックも入植開始時からすでに45である。後発ゆえに自然な自律的展開ではなく、旧来地域での既存の命名動向が導入されたことはあきらかである。

引用文献

- Billy, Pierre-Henri, 1995. 'Nommer à Toulouse aux XI^e-XIV^e siècles'. In: M. Bourin, et P. Chareille, eds., *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, t. III, pp. 171-189. Tours: Publication de l'Université de Tours. (以下、出版地、出版社省略)
- Bourin, Monique, 1989. 'Bilan de l'Enquête: de la Picardie au Portugal, l'apparition du système anthroponymique à deux éléments et ses nuances régionales'. In: M. Bourin, ed., *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, t. I, pp. 233-246. Tours: Publication de l'Université de Tours. (以下、出版地、出版社省略)
- Bourin, Monique, 2002, 'How Changes in Naming Reflect the Evolution of Familial Structures in Southern Europe (950-1250)'. In: George T. Beech, M. Bourin and P. Chareille, eds., *Personal Names Studies of Medieval Europe. Social Identity and Familial Structures*, pp. 3-13. Kalamazoo (Michigan): Western Michigan University. (以下、副題、出版地、出版社を省略)
- Chareille, Pascal, 2002. 'Methodological Problems in a Quantitative Approach to Changes in Naming'. In: George T. Beech et alli, eds., *Personal Names Studies of Medieval Europe*, pp. 15-27.
- Durand, Robert, 1989. 'Données anthroponymiques du Libro Preto de la Cathédrale de Coïmbre'. In: M. Bourin, ed., *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, t. I, pp. 219-232.
- Durand, Robert, 1995. 'Le système anthroponymique portugais (région du bas Douro) du X au XIII siècle'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad. Sistemas de indentificación hispano-cristianos en los siglos IX a XIII*, pp. 103-120. Valladolid: Universidad de Valladolid. (以下、副題、出版地、出版社を省略)
- Durand, Robert, 2002. 'Family naming and the durability of the Nomen Paternum'. In: George T. Beech et alli, eds., *Personal Names Studies of Medieval Europe*, pp. 71-86.
- García de Cortázar, José Angel, et alli, 1995a. 'Antroponimia y sociedad del Cantábrico al Ebro en los siglos IX a XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 205-230.
- García de Cortázar, José Angel, et alli, 1995b. 'Antroponimia de Burgos y su alfoz en los siglos X a XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 231-258.
- González Vázquez, Marta, et al., 1995. 'El sistema antroponímico en Galicia. Tumbo del monasterio de Samos. Siglos VIII al XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad.*, pp. 49-72.
- Hubert, Étienne, 1966. 'Structures urbaines et système anthroponymique (À propos de l'Italie centro-septentrionale, X^e-XIII^e siècle)'. In: M. Bourin et alii, comps., *L'Anthroponymie*.

-
- Document de l'histoire sociale des mondes méditerranéens médiévaux, pp. 313-347. Rome: École Française de Rome. (以下、副題、出版地、出版社省略)
- Krawutschke, Eleanor, et Beech, George, 1995. 'Le choix du nom d'enfant en Poitou (XI^e-XII^e siècles): l'importance de noms familiaux'. In: M. Bourin, et P. Chareille, eds., *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, t. III, pp. 143-152.
- Martínez Sopena, Pascual, 1995. 'La antroponimia leonesa. Un estudio del Archivo de la Catedral de León (876-1200)'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 155-180.
- Martínez Sopena, Pascual, 1996. 'L'Anthroponymie de l'Espagne chrétienne entre le IX^e et le XII^e siècle'. In: M. Bourin, et alli, comps., *L'Anthroponymie*, pp. 63-85.
- Menéndez Pidal de Navascués, Faustino, 1996. *Caballería medieval burgalesa. El libro de la cofradía de Santiago*. Madrid: Servicio de Publicaciones. Universidad de Cádiz: Universidad de Burgos.
- Mitterauer, Michael, 1996. 'Une intégration féodale? La dénomination, expression des relations de service et de vassalité'. In: M. Bourin et alii, comps., *L'Anthroponymie*, pp. 295-311.
- Montenegro Valentín, Julia, 1995, 'Antroponimia lebaniega en los siglos IX a XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 181-204.
- Portela Silva, Ermilindo, et al., 1995. 'El sistema antroponímico en Galicia. Tumbos del monasterio de Sobrado. Siglos IX al XIII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 21-48.
- 芝絃子, 1995. スペインにおける姓名システム—その由来に関する一考察. 西洋史学 178: 1-17
- 芝絃子, 2001. 平民騎士〈都市有力者〉層の誕生—奢侈令をとおして—、姓名システム—命名革命と結合姓の由来, In: 芝絃子、スペインの社会・家族・心性—中世盛期に源をもとめて—、ミネルヴァ書房, pp. 3-38, 101-166.
- Shiba, Hiroko, 2010. 'La revolución antroponímica hispana: la aparición del apellido y el Mayorazgo'. In: Juan Bestard, coord. y Manuel Pérez García, comp., *Familia, valores y representaciones*, pp. 51-74. Murcia: Universidad de Murcia.
- 芝絃子, 2011. 近世スペイン社会の一考察—命名の分析をとおして. 東海学園大学研究紀要 16 : 51-67.
- Suárez Beltrán, Soledad, 1995. 'Notas al sistema antroponímico asturiano en los siglos X al XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 121-132.
- 竹下節子, 1998. 聖母マリア—<異端>から<女王>へ、講談社.
- To Figueras, Lluís, 1995. 'Antroponimia de los condados catalanes (Barcelona, Girona y Osona, siglos X-XIII)'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 371-394.
- Zimmermann, Michel, 1995. 'Les débuts de la révolution anthroponymique en Catalogne (X-XII siècles)'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 351-370.